

## 「活動の概要と研究成果」

NO.J2427

活動題目:メコン川下流デルタにおける古代の環境と社会生活の復元:ベトナム南部・オケオ文化の集落址ニオンタイン遺跡の調査

所属:金沢大学 大学院人間社会環境研究科 博士課程

氏名:NGUYEN HOANG BACH LINH

2023年のニオンタイン遺跡発掘調査により、当地の古代居住コミュニティの定住を示す安定した地層構造と居住文化層が特定されました。主要文化層は厚さ35～50cmで、生土直上に分布し、高床式住居による居住が確認されます。8点のAMS分析と遺物類型学的比較に基づき、年代は4世紀から6世紀半ばと推定。特筆すべきは、TS2のL5.2層から発見された横切りのヤシ殻サンプルが1世紀CEに相当する結果(6-86 cal. AD)を示したことです。同一層の遺物が早期年代を支持しないものの、居住痕跡は1世紀から出現し、4世紀CEに大きく発展したと考えられます。

また、主要文化層直上には厚さ15～20cmの盛土遺構が確認されました。これは破碎土器片が密に混入し、TS2からH1トレンチ終端近くまで続いています。この盛土遺構はオケオ文化の他遺跡でも見られる一般的な居住形態であり、ニオンタイン古代住民のより後期の長期定住を示唆する可能性があります。これは、遺跡が放棄されたとされる最後の海進イベント(完新世IV期、約650CEに海面が+0.8mに達したとされる)と関連すると考えられます。この見解は、文化層内の潮汐影響痕跡や、汽水・海水性植物種の存在を示す花粉孢子・珪藻分析結果によって裏付けられています。

2023年の発掘調査は、ニオンタイン遺跡にとって初めて、植物種子や米粒を含む豊富な微細遺物サンプルをもたらしました。これらのサンプルは、統計、形態学的分析、および一部の代表サンプルに対するaDNA分析が実施されました。これはニオンタインで初めて学際的分析手法が研究に導入された事例であり、西暦初期におけるニオンタイン地域の自然生態条件と古代居住コミュニティの生計を、新しい土地への定住と開拓の過程において再現するための重要な情報源となるでしょう。